

## 地球の限界

6月の20日から22日に向け、ブラジルのリオデジャネイロにおいて、国連加盟国188か国等の首脳はじめ閣僚級の方々、各国の政府関係者や国会議員、地方自治体、国際機関、企業及び市民社会から約4万人が参加して「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」が開催されました。

1992年に「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」が行われていますが、その会場も今回と同じリオデジャネイロでした。以来20年、今回の会議は、このかけがえのない地球において、持続可能な開発をどう進めるか、特に、環境を保全しながら経済成長と貧困削減を目指す「グリーン経済」への移行が大きなテーマになっていました。

結果は、環境保全と経済成長を両立させる重要性を確認した文書を採択して会議は閉幕しましたが、内実は乏しい成果だったというのがマスコミの辛口評価です。

会議に対する期待とは裏腹に、合意形成の難しさについては、各国ともに想定していたのではないかと思います。というのは、環境保全と開発をどう調和させるかという問題については、これまでも、各国間、特に先進国と発展途上国との利害が衝突して来たからです。

発展途上国からは、地球環境の破壊を招いたのは先進国の経済活動であり、環境保全については先進国がより重い責任を果たすべきであるとの主張がなされてきました。

1997年に京都で行われた気候変動枠組条約締約国会議（COP3）では、こうした途上国側の主張に配慮して、温室効果ガスの削減目標は先進国が負う形となっています。

しかし、COP3以降の世界の状況を見ると、発展途上国の一員であった中国が今ではアメリカを抜いて世界最高の温室ガス排出国になっているというように、地球環境をめぐる状況は大きく変化しています。最早、地球環境の保全は、先進国だけの力で何とかなる程甘い状況ではなくなっています。

今回の「リオ+20」では、大変重要な報告がなされています。それは、ス

トックホルム大学の研究機関「ストックホルム・レジリアンス・センターによる「地球の限界」についての研究成果です。

この「地球の限界」によると、「1万年前の氷河期以降、地球は例外的に安定しており、これを維持するには「気候変動」「成層圏オゾンの減少」「海洋酸性化」など9つの分野で限界点を超えないようにする必要がありますとしています。そして、既に「気候変動」「生物多様性の損失速度」「窒素循環」の3分野では限界点を超えていると指摘しています。

確かに、人間社会は、18世紀に始まった産業革命以降、地球という資源を貪欲に食いつぶしながら急速に発展して来ましたが、その利益の大半は先進国が呑み込んでしまっています。こうした中、発展途上国の人々が、自分たちも先進国のような豊かな生活をしたいと考えるのは当然であり、そのために経済発展を目指すのも理解できます。

しかし、私たちが住むこの地球は、漆黒の闇の中に、青い宝石のように浮かぶ誠に小さな存在です。この小さな地球が、限界点を超えて崩壊すれば、先進国の人々はもとより発展途上国の人々にとっても、地球が安心して住めるところではなくなってしまいます。つまり、地球環境を維持していくことは、人類共通の利益なのです。

かつて、ローマクラブが、地球の資源には限りがあり、人口増加や環境汚染などがこのまま続けば100年以内に地球上の成長は限界に達する、と警鐘を鳴らしています。

ローマクラブの指摘を待つまでもなく、人類社会が今と同じように経済的な発展を追い求める限り、そう遠くない時期に、資源が枯渇し、環境が回復不能な程に破壊されてしまうに違いありません。

そうした最悪のシナリオを避けるためにも、「リオ+20」において採択された宣言文「The Future We Want（我々の望む未来）」に向けて、各国間が利害を超え、人類の英知を発揮することを望みますし、日本が、この環境の分野にこそ、もっとイニシアティブを取ってくれる事を期待しています。

（塾頭 吉田 洋一）